

村井氏藏書

ようなづの事は月をうたにこそよくよむものなれ
山路八十九坂の雪重なれ家氣あるおよ時をもうたへる
てもやとこそよくよむものあるをいふり。又おのれ世捨
人の事なれ名利を打
世事を省きて閑
をよろこぶ。三句よりつづく
よなづの事は月をうたにこそ
のうちをふるぐさしき歌の字
あらんうぐさむとよめる古今うたの
ちくさあるよの更級や姨捨山の照月をうたへる
ある人此月をうたへりとあるこそ
ひとりごとうあんなるをもとなりそ
わすれもせぬをおもふとよめるこそ

嵇康　　其の抄并野に云ふ。文選四十三、嵇康与山濤絶交書に云ふ、濤に山巨源に親しむ。魚多く心甚だ楽しむ。之に行ふ。俗吏。此の事便慶。安んぞ能く捨てん。其の所楽を従ひ其の所懽を成さん哉。嵇康字叔夜。行状乃七賢の人なり。

晉書に曰く

江漢に云ふ。玄賓坊辞大僧都に任ずる事多きを以て、終に不往。世を絶て閑居するを以て風月を友とし、詩酒を楽しむ。世人其の風を慕ひ、詩酒を以て賓客を招く。乃ち人をして之を伺はしむ。賓酒を設けて詩を賦す。其の人帰て之を告ぐ。世人又之を慕ひ、争ひ来て賓客と為る。賓又詩酒を以て之を招く

彼事あるの多くこのほどこうつきそれも
古代のもてなしやうなれ
事おこらのあるこ
手吟ら光源氏の界へ乃詞もくくり 篇末云
ろのこふよくへて却なまのみち乃ゆこ
れようばの物紙んりまして他りあるこ
古代乃もてなし むくり
悟古図などこ古のいづまもいくへ乃最もれ図の姐
豆乃所なじをうたしてあり。他の世乃立れ及
ところりあるぞ。論語よ航不レ航とあるいふ乃
笑ものいふ人乃制ばりあるふ事をこ
又のこと糸るなどぞむくへの及古じいこをこ
いふ句をくらまれいくへ
車のこけよ次うあるこ

野云考古図

野云大立番匠乃事

もてあまよう記あるまよといふこ
いふぐう紙ぬもちいくへ古
学問るをぞ佛ふう乃ろ
れとそふる紀人いぬ
ふこれ句 寄云消息の文まこ

及故もも古りぬそうこ
ぬりくあり紙るをぞ及故堆とい。
いふくへ ほめたる句こ 車りぢよ
はくうこりぢれいこうふぐ紀そまり
てくく 次うぬよ

野云

この双氏のうり多き句こ

主夏寮 職員令云。掌二燈燭松柴炭藁等一之一

人数ぞて
さ物ぬ句乃人脂燭を執て供ふ。主殿寮二人
高明をとりて供をせりと云へり。二人数ぞてといふべし。

ふるまひあり　和名ニ姫大
夕天仍加之　東叡ノ物也ちとてみる也
ちろくせよ
哥合題ニ一条院の御宇ちとてみる也
寂勝法橋を講せしむ　寂勝講　年中行事
西ノ京の天王ノ道場ニ現ぜさる勢ひをちとてみる也　厳重
季冬ニ及ひ月よ吉日をえらひ講ぜられ御ニノリ
ちとてみるの儀ありて御ニノリ事始ありて
江次第七ニ六ノ五月最勝講。時ニ公卿参入ノ候殿上次ニ上ノ
卿依テ仰ノ仰テ殿上ニ令ニ打ニ鐘ノ次ニ出ニ次将等参ノ上。次ニ
公卿参ノ上。着座。次ニ威儀師ニ令ニ衆僧ニ参ノ上。着山座。次ニ
講師着礼盤ノ下ニ

御ニノリ乃ち　書抄ニ野云御ニ講ノ序ニ最勝講ノ
儀をちとてめしおこなはるゝ也。序ハ内ノ裏
ちとてみるく休息ちとてみるを直ニ序ニよがごとし。直ハ宿亜井
乃ち着り

おとろへある末乃世ニハいとゞ
ありさまこそ世ちとてめでたけれ
書云ハ始ちとてめでたけれなれ
いにしへをうくて遠ちとてみるを
さしぶニ代の風あまねく梯ノ中ニハ
九重
内裏をいふ。禁門ハ宮ノ門ニ有ノ九。潤門
庫門　雉門　應門　路門　皐門　遠郊門　近郊門　城門　皐門
おとろへず　ニ久ちとてみる也
世ぢうす　世倍ノ字ニ誤ル

露葉(ロヨウ)の多(オホ)き物(モノ)。何(イカ)面(メン)何門(ナニモン)などいひつべくも
あらぬ。小蕨(コワラビ)の萌(モエ)出(イデ)たる。春(ハル)の設(マウケ)せごといふべく
もあらず。さゞれ石(イシ)面(メン)などいふべくもあらず。
上(カミ)つ乃陣(ノヂン)とく事(コト)もあるべくもあらず。
乃陣(ノヂン)の事(コト)ゆゑ。内約所(ナイヤクジョ)などいふべくもあらず。
乃陣(ノヂン)の事(コト)ゆゑ。優(ヤサ)しき事(コト)もある

なぐらまハ賜(タマハ)りぬべきものなり
中よりあまでめでくきこゆること
ちるさくら面(オモ)あかれらうろぶ
覧(ラン)殿上所也。御物忌時、下(クダス)之ヲ
面(オモテ)のおれ階(キザハシ)のもとの郷(サト)より
云。小板敷、西ニ有ニ棹(サヲ)間(アヒダ)ノ一ツ庭。時ノ箭(ヤ)。膳(カシハデ)棚。灯(トウ)樓(ロウ)
二条院乃御(ミ)時こゝろべてい
蔭(カゲ)のもと　源雅(ミナモトノマサ)亮(スケ)朝臣
川(カハ)もとゝろうろ
書抄　芳野云、今ハ渋(シブ)柿(カキ)面(オモテ)の
落(オチ)りぬれまうまぜよ
今ハ紫宸面(シシンデン)乃面よありけり
きせよもぐ。ざれをばきの
表乃御(オホン)面の紙ぞ

あるハ陳(ノブ)ぬるもの
事なれもあくまもとゝろれ
支度云。よろしおくとゝ
もとゝろあよいづまも御(ゴ)
ゆるやとそ　とうとゝ

ゝもばゝさ乃云さ面
芳野云。上ハ大臣大将納言乃。落(オチ)ぬる
ぬもる殿云。宇(ウ)舎(シヤ)乃時
下人(ゲニン)ども
ざゝ差別(シヤベツ)あまどゝ。趣(オモムキ)
ゝも人ハ　陣(ジン)乃下(シタ)
ゝと　内侍(ナイジ)所(ドコロ)乃神鏡(シンキヤウ)を
あ(テン)ゝゝやゝ

小蔀(コシトミ)　宣秋抄ニ
有ニ小蔀ノ一。上
見(ケン)殿上所也。御物忌時、下(クダス)之ヲ
小板敷　あまも
面(オモテ)のおれ階(キザハシ)のもとの郷(サト)より
云。小板敷、西ニ有ニ棹(サヲ)間(アヒダ)ノ一ツ庭。時ノ箭(ヤ)。膳(カシハデ)棚。灯(トウ)樓(ロウ)
二条院乃御(ミ)時こゝろべてい
蔭(カゲ)のもと　源雅(ミナモトノマサ)亮(スケ)朝臣
川(カハ)もとゝろうろ
書抄　芳野云、今ハ渋(シブ)柿(カキ)面(オモテ)の
落(オチ)りぬれまうまぜよ
今ハ紫宸面(シシンデン)乃面よありけり
きせよもぐ。ざれをばきの
表乃御(オホン)面の紙ぞ

あるハ陳(ノブ)ぬるもの
事なれもあくまもとゝろれ
支度云。よろしおくとゝ
もとゝろあよいづまも御(ゴ)
ゆるやとそ　とうとゝ

ゝもばゝさ乃云さ面
芳野云。上ハ大臣大将納言乃。落(オチ)ぬる
ぬもる殿云。宇(ウ)舎(シヤ)乃時
下人(ゲニン)ども
ざゝ差別(シヤベツ)あまどゝ。趣(オモムキ)
ゝも人ハ　陣(ジン)乃下(シタ)
ゝと　内侍(ナイジ)所(ドコロ)乃神鏡(シンキヤウ)を
あ(テン)ゝゝやゝ

御拝 兩段再拝 詑女官引鈴鳴之三度 上下畧 𥫱ち乃
拜ゐさおとぐ 寿云寔基公之。野宮左大臣公雅公
乃孫ゐ祖父大臣家定公乃孫
斎宮の野宮ゑりまいりまして有さ海こそやうく
面白きことのゝぐりとは覚えつゝ。筆仏などいつゝ
ちぐ深きたどりも有つ
山路しお泊をうそて上代乃跡風をたづぬる神色を
やそうそ申り 斎宮と 天照大神乃御
杖代ゝ旨 宮をまもるゑつゝ。一年より斎王ありつゝ今年勢
まちぐり。斎王と 伊勢乃斎宮乃 斎院とも
いつゝきまちぐせり。或抄云 倭姫命世記ニ云。大足彦忍代別天
やうよんめりやはあやまりぐ。世より后よりたまふるの
皇 天。齊内親王 仕奉 物部八十氏人々定給 天十二
司寮官等 遠波 奉り移 五百足止
二月辛巳朔甲申 遣二五百野皇女於。皇太神乃御
杖代止志天。多氣宮造奉天 齊慎 差令侍給支。伊勢乃
斎宮郡 行始 是也
かくて代をへて。後字多院の皇女 媄子内親王七十餘
代のちよ 野絲をり。さしも 垂好法師の御代も
餘風をのこれりつゝべし 墨ぐろりありまし
ありさ海
斎宮を定めりと事。皇女ますくも
又ハ親王乃ほしもあるまてもゝ。ト宮ゝとてうつゝひて
宮めりさるゝとゝ。さて宮めをりつゝ二年めの八月

より。かくまで野ゝ宮ゝまいりてとゝや
伊勢乃斎宮の御ありさまいと清浄潔斎のありさまなり
とゝそ
江次第 十二日。斎王卜定事 伊勢 上﨟参
議着陣。蔵人奉レ仰向諸司。具不レ於上﨟二。蔵人仰
可レ令レ勘申一ト定伊勢ノ斎王一日時由。上﨟仰テ外記ノ官令レ勘
申一。入レ奏一陣令レ奏 上﨟作レ筥 返給之 後上﨟
下レ兵二。次二蔵人奉レ仰テ上﨟ニ曰。其内親王若其王可
為伊勢ノ斎王一哉由令ト申一。與用未レ嫁人一。若無内
親王一依二世次一簡女王ヲ下畧
やさくありしさまのごとり
源氏賢木巻。野宮にこと成うそうしたる。ものゝ扱ひなどくわ
をれもうるはしなるおほ殿第にをはしまいそくやどもの
ありくいとうるまでもあるかとさへぞ人ゝ見たてまつ
りうるさうぞきたうしたるさまなどいとゝ
をつゝまんほど紙燭ばかりやうにてあり
うちあるじ命婦とりて
経佛やなどもつゝみて
佛乎中子止云。経乎志目伽跡止云。塔乎阿良々支
止云。法師乎髪長止云。優婆塞乎角波須止云。寺乎
瓦葺止云。齋食乎庁食止云。
画按云。志目伽跡とハ深更のことゝ聞ゆ。そこで云ふ詞なれや
をぐて祓乃やうなことをそくくうるさくいふ詞なれや
それより森のそこらにもあるらめどいとゝ
ふてさま未うゆふ

こゝを小野といひ伊勢なる
きの布禰 春日 大原野 松尾 梅宮
あれたり聖文ようぎこと越る神社のるさ
事をゝこ 西坂 赤乃玉垣こ并垣殘離たるこゝ
排 賢木 龍眼まこゝをぼこゆるぎこともこり
仲よき多たる
〇伊勢 内宮外宮こゝ申事二依る。古事記 釋日 内宮
者。其地名曰二宇一治御一故二以森一内一宮一也。外宮則外者
遠キ義也。是 天地開闢神座故。因テ遠キ号二外宮一也。亦
祭主公算ガ云。太一神者與二坐一故。号二内宮一。度會者外二
坐之故二申一外宮一トこゝ 伊勢内外諸宮記云。内宮天照
皇太神宮一坐 在度會郡宇治大日孁貴 相殿二坐
右萬幡豊秋津姫命。イニ掲ル幡千々姫命。左天手力雄命
外宮豊受太神宮一坐 在度會郡沼木御
山田原二 國常立尊

仁天御中主尊 相殿三坐。左天津彦々火瓊々杵尊。右
天兒屋根命。天太玉命。 二十二社次第二吉田二位兼倶作
云の内宮 垂仁天皇九五年二鎮座 外宮 雄畧天皇十七
年二鎮座こゝ小我物共宗廟こそおりまして
〇於蔵 下鴨乃御祖神ハ一条禄阿法院よの。玉依姫
とゆ。於蔵建角身命の女子こゝ。共二社
次男云。御祖社 別雷神御父也。大山咋神。松尾 日吉等同
躰ゝこゝ 李吟云。乳乃こゝ 上加茂ハ共二社次第二云
事社乃面こゝ多ゝ 別雷神也。天武天皇六年二月 營社檀。共二社本縁二云
後一条院行幸乃時。山城國を寧進ゝ給ゝよ仍て。今
者當國乃惣社こゝ坐ましこ
〇基日 宮所云。二十二社次第二曰。第一 建甕槌命
常陸國鹿嶋。第二 齋主命 下總香取。第三 天兒屋根命

河内國平岡。第四姫大神 伊勢太神宮。若宮。保延以後造
神殿。御本社者同殿。神護景雲二年正月九日大
和國添上郡三笠山御蓋跡。同年十一月九日寅日
寅時宮柱立御殿造畢。自常陸國御影向御乘物
以鹿為馬。以榎木枝為御鞭 或説曰春日若宮
天押雲命 中臣祐通祭之

○平野 二十二社次第曰平野五社。第一今木神
日本武尊 源家氏神。第二久度神 仲哀天皇 平家
氏神 第三古開神 仁徳天皇 高階氏神。第四
比賣神 天照太神 大江氏神 第五縣神 天總曰命
四姓 中原 清原 菅原 秋篠 延暦年中立件社。貞觀元年十一月九
日始祭之
季吟云。立花城也。墓聖徳太子墓所云々

○住吉 二十二社次第二日住吉。第一底筒男神
第二中筒男神 第三表筒男神 第四神功皇后
御宇伐新羅國。明年向京。隨神教以鎮坐
二十二社本縁云。玉津嶋明神 名衣通姫 坐此四坐故
住吉八社と申和哥の道を護り給ふ
社家説云天照大神を一座と
し。底筒男中筒男表筒男を一座と
后を一座として宮所の神とす

○三輪 二十二社次第二日大和國城上郡。大神大物
主神 神代垂跡也
本記云大巳貴神一名大物主
神。大三輪明神是也。日本國地主神
○巻布綵 二十二社次第二云山城國愛岩郡貢布称
神社水神也 二十二社本縁曰此神賀茂別雷也

祈雨止雨時八丹生と同く奉幣せらる

○吉田　二十二社次第に云ふ山城國愛岩郡吉田神社
四座。神名同二春日一社二負觀年中二鎮座一亦日中納言山蔭
卿勸請云々　一条院永延云々　始二祭礼一
季冬之吉田乃祭場所事　日御太神宮と号ア
次第裏書云ふ春摂天皇之時祭二神祇一之所也
り。白本家上と称ス。此日女紀神代巻の縁起を以て祭場所と如意嶽
一ヶ所ありと。吉田よりは
宮まで指川乃西大炊御門の小路を大内裏乃
東南の隅のみ社を方二にひろく八神殿もの乃吉田よりさ

八神殿の南方乃外玉垣内玄武の御社
九月十一日乃例幣を奉りけり世俗乃
八神殿と云　神皇産霊日神
玉皇産霊日神
足皇産霊日神
事代主神

○大原野　二十二社次第二日同春日仁壽元年二月依
太皇太后宮御山城國葛野郡大原野仁宮社廣知
云て三座共に祭礼を始ぬ

○松尾　延喜式第九云山城國葛野郡松尾神社二座
二十二社次第二日松尾　大山咋神　市杵嶋姫神
旧事本記四云大山咋神此神坐二淡海比叡山一赤坐二葛野郡
松尾一用二鴨鏑一神者也
第一松尾社　今社家説云松尾七社者
第二月讀社　第三櫟谷社　第四

三宮　第五宗像社　第六　大神社　第七衣手社
　　四座是延喜式乃所ひ添ふるへし
○梅宮　二十二社次第曰山城國葛野郡梅宮四社
第一酒解神　第二大若子　第三小若子　第四
酒解子　當社者仁明天皇母后。文徳天皇祖母。太
后檝氏神也　社家説云　大山祇令
房火火出見尊　小酒解神　若宮　檝諸兄公
野姫之御娘天皇乃后ましまし后檝清友乃
むすめぐし清友が孫。ぞ。ふたりの御子ともに
男天皇ましまし和気清麻呂仁
是定まれを養飼ととも
季吟云是定とい西月
ふ人をさ名目ぐ檝氏乃本祖ぐよ
私乃此中納言道澄公大納言ともせ一時宣旨

をうふり給ひしより檝家よ傳りぬ
秘抄ょ是定をあまさぐと
書云枕草子云神ぬ松尾
たり平野はいづれ
とりよみそやりとい
乃神又梅一雲養さ
季吟云此乃神社のまの
行とぐ云ぐ云ぐ
たろろあるべ。ロ訣有
あもろ川のあち世ぬ
さりたれ一ひゅ一ひゅ
も人をねぬろとりかり
ぬ飛雀ものそまで雅
此世云云の

来代をへて事をうんじ。あるひは富を学をもとめてとおりゆくべきみちのくの人とてもさすがにうらやましくのをりく

大和乃くにのうちせばきにはあれども青垣山こもれる倭しうるはしとうたはれたる国なれば山川のながれのうつくしきことはいふもさらなり殊に秋よいとをかしきをひとり春秋はせんとするうらみありとかや

又川ふちもあしねばやどりゆくのこころもとなきにはあらねどもいにしへの人のこころばへをおもひやるべきよすがも

菅三品詩ニ桃李不レ言春暮ル煙霞無跡昔ノ誰栖ト云ことばを用
ゐしくだりなどいふ〳〵のやんごとなきうらやんごとなきそのこゝろ
それさ京極殿法成寺ノ御堂殿乃御ありさまなどを乃ろこゝろ
ざしなるべし。事ハ一ツ也。されどもいまだしまでとおぼしてんや
参ゐでよそさまにありけるまの御堂殿乃御りみで勢
ひての庄園おほくよろづ我ものぞうめでゝ御門の御
うしろ盾と世のうわさしてもいまだおぼしてんや
いうそうん安らもうぶりあをそんとおぼしてんや
大門金堂などもくまで有しどこ西ノ京門も
焼ぬ金堂もそうなまたうまくおぼしてんや
きまゐるまでなし。云ゞ
のこりたる丈六乃仏九体のことをふとくてもうびおそ
一まして成大納言の宅。扉あぢやうふ
ひらきであるなる。法

はれを又いのまでうあ
ぶぐきをのづうろぐ
ふたまう人もの
見よりもやうやうあり
むーのたゝーを
のと
ちふふーてとのゝ
とそ　事云京極殿
云ゐまし古ゝ
極西南北二町被入道長家或大入道殿家
上東門院是也。後一条後朱雀後冷泉三代帝。於
此所誕生。匡衡宅。皇后四人。於此所誕生。此家紀伊嶋
賀茂明神通給ふ。後一条後冷泉被加南一町
注ニ云ふ又京極殿ハ

二月より道長ひさしく従一位にて。治安二年
七月十四日御堂供養ありて。栄花終りぬ。
大鏡云。太政大臣道長の御子
上東門院 皇后宮 妍子 中宮 威子 尚侍 嬉子 三宮 乃御息所
乃次。南代第一東宮の祖父にて御門
三后三人みな立てまつりそめ給事。入道殿
より後。三人ならべたてまつりそめよりは。
大納言二人 斉家 公信 中納言 長家 などの法師やうにくおはしまし
もさりやうにまいりあつまりおはしまし
おりしぬべきにくめげなる御堂にて。
まさる御事は。唯一妄二ふたつ多き武者の不比等の大臣の山階
る。基経のおとゞの摂政関白。乃一法性寺九条
殿乃。楞厳院あるじ乃帝の御おぢにて。
つまうへ大きさ小ぢんまりと

みそなはし 先立 釋書云寛仁三年
三月大相國藤道長公薙髪九月受戒千東大寺
法名道覚又云一万壽四年十二月 道相疾於法成寺
帝幸因納五百戸千寺又供南北二京僧一万人
我御ぞうの 夢云我御門弟緑
ろく世あくまで 野云按政南白大臣ろの夢
かぞうりあせそんとう 後成 ふさ臭ん
とう御堂どのおが 先さ ぢおとのんも。もでよ夢ある
御ろうりおいくあまさうろうべ。今ハねさうろ
大門金堂などちくまで 子載集云花さうり
法成ちへまりて給そうろふ。金堂乃まへなりくるものちり
そうをとくさうろ 後成 ありよそうひ。をそう
むさうもちりの事をあうれとうろよ ばうの乃ふを
後成ハ御堂殿ちりの事のうれをなうべ。く後

往生要集觀察
門云項上八万四千
髪毛紺青相器
又云眉間白毫右
旋婉轉如五須弥
山眼如四大海水
云佛眼青者
蓮華又云
色赤好如頻
婆菓

成ハのけまでできたり 西私の比 事云
人皇九十九代花園院の年号 野同 西壽院
事云野同 法成ちふ名 壽院
壽事院と名ばく。仏九部 とり。京相るぐし上忍中忍下品よりめろ。院御
らく事世傳 又六の仏九部
業花扇 よ。し壽院乃九部の事ハ
十八集云。仏をとくとき まで光
一まとり。法のはうべへ 緑のを浄。眉間の光毫ハ
めぐりくえんてん せる事又漢法のごとし。蓮花乃
眼ハ四大海をうこへ。御 唇ハ頻婆菓乃ごとし。又云
うろふ観音勢至御 金ふり。く玉のやう
らくをあれて。空天をたくをうり。一仏の
御ろくんや。御ろくぐ。

みづからひとつのべつそふあしごとく丈六八一丈六の
の仏。往生要集ニ。彼佛。是三千身一躰之身也。於彼一身ニ
所見不同。或丈六或八尺或廣大身ニ又曰丈六佛ノ白
毫ハ長丈五ニ 行成大納言 書并野ニ遺誡ニ
伊尹の孫の義孝の子也 純書乃あと。道風 佐理 行成
を三蹟とそ 世行がかく扉 大和の繪ニ
いはく。極楽院後三条院の大嘗會の悠紀ニ基乃屏
風をかく又寂昭乃家をかたる人ニそ外肉裏
乃部ニ事文けは成る乃家を行成の肉乃扉ハ
ゆきづかにて 夏なと秋の野邊抔よんてたり
栄花物語十八云小南乃そてくの東乃そてくの扉
ごとり画をかき彩色をして句をそせ
させたまひてそ。九品蓮臺のあり
さまなと 云々 花扉の内よりの功德乃有あり繪文を

と書まふ。今も宇治の平等院のおほん堂乃扉
ありと。まことに名ある形よ 俊房乃抔ことく繪
文をかきて侍るとそ書ぎひたり
法花堂 法花三昧をそふ堂 かくれ乃
名ありておく
金堂 同ニ法成寺乃内ニ法華堂
まてそのあとをもとさめくハるぬ人それとこまか
しふかう人もなくそなりあまとをた
されむところよんざうくそ
そられうべそれ
さまざまに さうあるまれをとおとうをそいふ抔
くに世乃世なれだとと ちご居ふ
ようぎうとそ
風もあるさまざまにそうほふ人乃ほとけもよまれよ一年

風我物ぐさにあらねどものうく我世よりふるき事のみ
乃ちうれしもまさりてうき事はさわるれ
ばなほざりにもえすてうき人のみをやうやうにくもあさましき
風を吹あげてどうろう古今集乃序
聖跡よひろう人のみぞ風をあはれむ又小町
ろみでうつろひぬる世中の人の花もさそはぬ
山ニ着乃詞ともくうつりやすき人のこころ
拘うごかぬ月乃程の表よ忘れがたき事をもいひ
ゆく世乃習ひをもよく爲九亞相乃尊底記よ玄清法
印云ぬきくも面白き事もあるこの古事もあるとも
うもすてゝ二字をも三字をもうつろう人をさそう拘人のみぞ
風を吹あげぬ花の風をあはれむ人のみぞ
ありけるとゝいふことの葉こそ
いひながら一句のありけるをも忘れがたきこの
古今よ 古歌門よりやすく人こゝろはうつろひやすく
いひてことの葉ばかりぞ昔をしのぶよすがなりける
我世のわたりゆくこゝろ
うつろひてのちのあらまほしきねがひ世事の人
も一向よ死別の人の中よ
されどもうさいとのそまぬこゝろひ路のちまた
乃ちうれん事をもぐく人もこゝろ
あまたり人の心の始めありて終りなく
事をもとりてこゝろまり

大楊子見達路而哭之爲其可以南可以北墨子見練絲而泣之爲其可以黃可以黑高誘注曰悕其本同而未異野同

堀川院の百首の哥の中にむらさきのそめ色よりもふかきものはなみだにぞしる

堀川院の百首　野同

夜の百首とは後大納言藤原公實勅進ありし哥の歟　堂の部

むらさきのそめ色よりもふかきものはなみだにぞしる

苔みづいとど袂の乃ち乾く間もなし　野同

ぐそくの法ぎ乃ち脱ぐ　野同

ある紙なのつくようにもちひる人のみ

うりうく。　野同

あつまてくるり　さるほ仏ん　さまざまけり　野同

卽國ゆづり乃節會也　野同

をもうくなどうくぶりなりんそれ

いにしへ世上の變改をうくぶりなりん。天乃帝よりも牧その

事あるべーさそうふおほくひくお法乃人のみ變改をうくべーよ

もつてのほかなり　野同

天よ乃信紙書宮へゆづりの一時の節會　讓國ともいふ

帝讓位ともいふ

事吹く云時玉ゆづり乃節會

山形等江次第よんくあり又後嵯峨院宗紙へ拔書

信の抄抄よ云。御讓位乃時ハ踐祚乃儀式ありの帝玉ゆづりへ天

劔璽渡御。新主の帝所の儀式ありて玉ゆづりへ天

下乃事事世のうり先たるふようにて恒常といふ

先んとあよ。踐言固々關とうまをもんおよりへ

踐言固とうまをもつ或書日ふよんで陣のこをよつま

て六府の将佐を召して令もれも将佐稱唯して退く事 四関と六堺を固むる事 古ハ奥別の夷やつこをもれも参り朝入まつる支あり そもむる 今ハ伊勢の鈴鹿ゟ東山 東海の関を固めんかために東山 東海の関を固めん為に兵士を置れ 又ハ越前の愛発の不破をもつて固めらるゝ事 第壱の儀式 大臣陣の座にて内記をめして宣命の草をもたしむる事 大臣陣の座にて内覧奏あり 宣命使よハ中納言或ハ参議を用 則三人よ作之 天皇南面よ出御 吉日を撰ミ 陰陽寮をうかゝひ 御簾をうちて あるハおもてよ 近衛次将を繧繝脈よ胞よ 蜜胡服を着て陣をひく 常の儀よ同 よハうの座よ 大臣陣を立て 軒廊よもとゝのへ 内侍階よ隣て召れ申を 若内弁宣命を勧ふとりて

江次第 題書ニ 殿位者定群臣 井百官列位也 職員令云 親王 已殿列立 已位

つゝて 罷出 ゝく 元ゟ不法ゟく 閤門を 俯 されハ 内弁 まよはく 内弁二音舎人と召せ 舎人 納言ゟうりて 殿よ つゝ 此時内弁刀禰召せ 刀禰ゟ六位以上乃人を ゟうりつゝ後 従て 参上 へ弓矢を帯て 列ゟうる次よ 内弁宣命使 召ゟ

同主乃御所ゟ三種の神器を新帝へ渡さるゝ
掃部寮路ノ間ゟ笹道とゝさゝて遷御の次将あ人
劔璽をおさく笹道のうへを赤地の錦包ミかゝれ扈従と
り奉るごとく。近衛乃次将階をのぼりて内侍所ゟ
さぐ内侍二人ゟの
を 内侍所渡御乃時八六府并職事一人儐ま
ゐる
主上八遊上ゟおりさせ給ふ
劔璽内侍所を三種の神器として至位とりけつ
せ給ふとゝさゝとゝさゝとゝさゝ事ゝ内侍所ゟ
温明殿ゟ劔璽八東御殿ゟ安置ゝさゝとゝさゝ
寶劔八 雄氣記云草薙劔亦名天叢雲劔是也
日本紀云。素戔嗚尊乃授所帯十握劔寸斬其蛇。
至尾劔双少缺。故割裂其尾視之中有一劔。此謂
草薙劔也。素戔嗚尊曰。是神劔也。吾何敢私以
安乎乃上獻於天神
居上常有雲故為劔名
武命の腹河ゟて
お紀京ゟ天皇ゟ紀
神璽八八坂瓊曲玉也。舊事本紀云。玉作祖櫛明
玉神作八坂瓊之五百箇御統玉矣。禁秘抄云。神璽
自神代千今不替。壽永海底求出。以青色絹
纂之。以紫糸結之。如網内侍持間。不緒。指入程綾筥
中鏡一程物動。這今不可頃
内侍所八恐神鏡也。日本紀云。使鏡作部遠祖天練
戸者造鏡又云日前神方開盤戸而出焉是時以鏡
入其石窟者鰭戸小堀。其堀於今猶存此即伊勢崇
秘之大神也 雄氣記云八咫鏡火珠所成玉本有法
身妙理也亦名遍都鏡。亦名真経津鏡。亦名白銅鏡

禁秘抄云 白河院仰云内侍所神鏡飛出欲上天而
女官懸唐衣神奉引留依此同縁女官奉守護云々
兼氣記云天照皇太神持寶鏡而祝之宣々吾兒視此
寶鏡當猶視吾可与同床共殿以為齊鏡寶祚之際當
与天壤無窮矣則授八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劔三種神
戝永為天璽 神皇正統紀云崇神天皇やう
く神威をおそれて同殿に安置し給ふ
凝姫神乃神勅を以て鏡を鑄さしめ天目一箇神
の神勅をもて劔を造らしめ大和国宇多郡よおの
てに両種を鋳顕す鏡を以て倭姫命に託て
神代の寶鏡及靈劔をもて皇女豊鍬入姫命に託て
大和乃笠縫乃邑よりもろ〳〵神籬をたてまつりもとゐ
をねよ倭姫命伊勢の国にいたりまつりき
名は要集云三種者一波八坂瓊曲玉二波十種圓満之霊是八咫
鏡二波十種感應之寶是八坂瓊曲玉三波十種成
就之加持是草薙劔此三種者實而具德故有權
實無勝劣者是也十種三種之霊寶是云神籬磐境無上霊寶
なりと云ふ事紀乃仮名日本紀乃仮名
うぐりうつしばそれ
かぐりなれど
新院乃おりゐさせたまひ給ふことや
あるらんのことをおもひこころをいたしてそちりく
新院云 要抄云 範圀院よおの国をべきる園々よ国代と
おもふ人ねごろ祈請のやうよなんてもりぬ 地りゆきせのし
要云神位をおりゐさせたまひこころをみてとうとき
胡線集りとみとうとき

ともみえたるやつこんあらハ
その物の名(ナ)をしるしてこれをもて
せめつるなり　　ともよめり
百寮訓要抄(ヒヤクレウクンエウセウ)に云(イフ)。禁中(キンチウ)の曹司(サウシ)を掃除(サウヂヨ)よく松葉炭(マツバスミ)燔(タキ)
などのことを記(シル)したるさまどうりて
多抄(タセウ)に侍御奴(サモノミヤツコ)ら各(オノ〳〵)寮(レウ)の下部(シモベ)住氏(スミウジ)のやうにおもひて
禁中(キンチウ)の官人(クワンニン)ともいふべからぬ(ゆへ)にこれ
をしるせるなり　人(ヒト)もなきさま
今の世(ヨ)のことにおしなされて院(ヰン)まいりの人(ヒト)も
さぞさぶしくおもふらん　人のあるをも
ぬべき

夜(よ)ふけぬ。天下(てんか)治(おさま)る御代(みよ)ハ
まいり人もなくていとやすらかなる
をお指(さ)す要(よう)とのことを出(いだ)したり

帝(みかど)さへ。おりゐさせ給(たま)へハ
まいり人もやすらいぬべし　ん
とてお指(さ)す要(よう)とのことを出(いだ)したり

んなるをもてそ人のあるをもあらはすなるへし
一(ひと)つ余(よ)ことなれとそれをもて人(ひと)のあるをもあらはすなるへし
諒闇(りやうあん)乃(の)事(こと)ハ。帝(みかど)さへ。おりゐさせ給(たま)へハ
まいり人もやすらいぬべし。倚廬(いろ)の御(おん)ありさま乃(の)
さまなど枢要(すうえう)をとりて。都(みやこ)のもの
うるさくおもふ御(おん)ありさまなどをもて
おく大方(おほかた)平(たひら)続(つゞ)きてあるそのへんに
山(やま)ハおろしの次(つゐで)まで云(いふ)なるへしおく
天子(てんし)の喪(も)よりもり物(もの)
亮陰(りやうあん)青庭(せいてい)　梁陰(りやうあん)鄭氏註(ていしちう)　諒闇(りやうあん)蔡氏註(さいしちう)　梁庵(りやうあん)王侃説(わうかんせつ)　諒闇(りやうあん)のこと
まくかうぶりてあるうへ倚廬(いろ)とものへん
野槌(のづち)よりまた浩瀚(こうかん)をひろげて云(いふ)　鄭氏於礼記又讀作(ていしおれいきまたとくさく)
諒闇(りやうあん)言(いふ)倚廬(いろ)大抵古者(おほよそいにしへ)天子(てんし)居(を)喪之(もの)名(な)云(いふ)
倚廬(いろ)の次(つゐで)に云(いふ)なり　諒闇乃(りやうあんの)説(せつ)ハ礼記雑記(らいきざつき)
上(かみ)に註(ちう)せり　廬(ろ)在中門外(ちうもんのそと)東壁(ひがしのかべ)倚木(いぼく)為故(ためのゆへに)云(いふ)倚廬(いろ)

めくりうあらくまく　野袴よ布帽額とかう
又末広かうもこぶつくうとありあ冠こまくれうあし
さうぞくとか　装束　服衣純色と男女人にうて
清純高純うりめかり
黒紙り拡うる物こ
金具　抜智古服　劔具也　装束　或藍草こく
劔柄　白佐女如常こく
常の大うさ消ぶるこそで男
平緒云文純色或考るこ
こもうのるとハ
拵こしたよ　いまくく
くもさ拵るれハ講尺もせねがこもさこぶ
さうぐうこうの大事一ケ条ハ拵よこ也あり。伊
勢物語乃終りの方のゆくの寺乃ふもしてハ純美

なうりを着ぬ考ぬ中はくあふようてよまり
うりのうしもとうもしぶ。物のくあふようてよまり
考経よも喪服の一ぶうこ
んぬぬ承り給
ちぐふふあり人べまうぬるまれひこさうぐ
せんうるれ
ばぬを枕双紙　源氏の幻巻　文選　文集るど九四角と
ともてうさうぬうやさしぬ文浙なうべしぬ決
う人のうれあうの事をうくり。夫より源氏とうぐ
そんうりぬ山ぬまくやをぬてうらまうべぬ
面白ぬうや
枕草子よぶうぬうさあひ。
ひうまあもひうでうど。又おうくあうり人の文ぬ
まくたう日さぐーあうろ

人もづまりてはなぢ紀事のもとひよ。伽とる紀事のもとひよ。伽とる
とりもちてえん。殘をとゝと思ふ及古なんど。やりをつゝ
中よりさ人のもとひよ。伽とる紀事のもとひよ。伽とる
こゝろ只その物乃もちをれば此あり人のみぶふ
久しく成ていろ物のまりくんと物ふ
えるそう。まりらびひさいこゝろ
人もつまりてのち
後漢書列傳五。乘歙書云。臣夜人定後とあり
なぢ紀事のもとひよ。伽とる紀事のもとひよ。伽とる
道書云人の移つまりこゝろ
移しぬまりて乃まずさひ
及古なんど
寿抄云源氏幻寒よ。物ちとりてうえ
ろべさ人のよぢ。物ちとりてうえ
やしせのひとんともろ乃氏あゝうひのもとひよ。伽とる
らをひそゝもろ乃氏あゝうひのもとひよ。伽とる
せて我ありそゝこゝろをさゝつゝ事なれとゝ
しぬまりけゝこゝろ物ほをぶ。ゝのやうゝ
もこゝろさ。ぶふ中ふ物のゝこゝろ志のべり事る我
乃ぢ成ぬべさゝと物ふ物ひをひくてゝとうゝぬ
人ゝ二三人づり。物まゝ人のあとろ。衣なふをを
のまゝくだよ。ものゝ
まて、下畧
楊仲武洙云。披帙散書。屬連又。有造有寫。或ハ
草或真。執玩周復。想見其人。紙労手。澤露手巾。
白樂天感旧詩寒。詩。歳二十年お旧沿集。十人砌私九人
只ゝ杉のゝ
彼源吟羅一長吁。老涙然袖濕二
ゝ世よはゝ人の生てゝ一世よはゝ

あるどうそう一時のあるもそうそう
なるなるとも　我久一くり
んもなくてとも　宗財ハ
いるるの一とも　衰うり物
人のるれあるぶりかのさうそう
中陰なるとも心里るどにうろひて。後あしくせぎきあよ
あまさ。ひめて。なのまぎにうろいあへさそ一
日数のをやくるうれぞ物まなう事にの事もなくて仏ぬぞその日ハいとのさ
多あらりぐくよりあれぬ。我一。まふ物ひさまさ
ようれ一さまハ多うべき

山第二第八中陰のありさ
中陰　要抄云。人死一くり
のうちを得るなり。未生中間より先又陰
識也なり。或云一七日乃至七七日必ず中陰と
なるべし。随願浄土経并無常経あり云云
委しくは古徳釋云識先了別　又曰識者心王
相取相貌　行起違從　色田行感　又云蘊也
釋氏要覧云人亡毎至七日必營齊追薦。謂之累
七。又云齊七。瑜伽論云人死中有身。若未得生縁
極七日住。若有生縁即不定。若極七日必死而便生
如是展轉生死乃至七々日住。自此已後定得生。
又云如世七日七日齊福。是中有身。死生之際。以善
追助給中有種子不轉生惡趣。故由是此日之福不
可闕怠也

山里ものにうつりて　亡者の追善乃ことあ
ものなどよゆきて住さま海辺
七日〳〵の仏事などもとゝのふ
事ゑんりやくぐりて
うもなしとのゝ
りあんぬ　ゆきうちくんぷ里ゝり名ゑうく
そ猶〳〵よ神うさ海辺
やまざと小一揆などに一所あるまじ
あつてこゝにてさみだれ
ちびうよ降りつゞきて生
らまたなどして文よ此月
ちう〳〵のまいあるうこと
いつゝうかぞり乃ちふ仏
御ぼめし

山三谷乃八人世をもやく
もうるをそ　ちう
云それ〳〵の事ちどりて
云々猶言如此如此也
不レ能レ載レ
物をおそれはゝこそ
乃おくよ事も恐〳〵恐惶
ことくるべし　向下學集よ。宍賀可防恙虫
の義とのゝり。堅粗ふよ事乃あちく一尺を
仰う。紙佳ふよたゞりを
いつとゝり。和名よ竹量と
れ御ゝ可等ち名
うまつくのまいハくまつて
と支いうたうさま

かれと同おなじ妄事を見みるらく。伺うかがふ事の已まずそこ
うしてしく学ぶあるらく。去ゆく日ひぐらし
も有るとも露つゆもしらぐるれだざいはいぐ
跡とどめざることぐりはざるぐねば
まやぐらぐらひてうちもまもらひぬ

此等ハ月日を空そらに消けすのみ
くるるをうらみて
源氏玉鬘よ幸有ぐざりぬるどあぐりゆゑ
かりを露つゆもそれよりぐ
寄抄云文選七九古詩云。去ル者ハ日ニ已ニ疎。来ル者ハ日ニ已ニ親。
出郭門直視但見丘与墳。古墓犂為田。松柏摧為薪。
白楊多悲風。蕭々愁殺人。思遠故里閭。欲帰道無因。
註云去者ハ喪ヲ死也。来ル者ハ生也。不見容貌故疎也。歓愛
終日故親也 野槌同

さいぐど 寄云野同上のごと月日くもるれぬ
ひぐよあるぐその夜
鳴ひをもぐらし別ぐさるりぐへばぐ
ぐるどひぐそもぐひもぐぐ。蓋好集よ懐旧云
歌ぐて ある人の僧さ
をざぐぐん あまもまを去若日深のんぐうまや
かぐへぐぐと紀山の中よ抛ぐて帰ぐべき日をもらまう
ぐはぐぐみまば程なく乗ぬ都婆も苦む。本紫あり哩
ぐぐ。名れ蜀葵の月のごそあぐぐぬぐぐぐ
第云第ハ紀ぐぐぐ
さまをぐぐ わぐぐぐ 死骸をぐり
ぐぐと紀ハ 人気踏ぐぐぐ まべき
忌ぐぐ 忌月忌日ある廟まぐべき日をぐ
乗都婆 要覧云又梵云蘇偷婆此云寶塔又

梵云寧蹉婆此云墳下畧 あらぬ世のつち
とひとりごちもてゆくぞいとよき人まか
さきたてまつる
四ひ出ゝく悪ず人あらんほどは
うせぬやうにとうづみをきてのちに
あとをとぶらひもせまほしの人乃人とも
をとぶらひの書乃ものがたりやうの
ものにて
なくなりぬるぞうれしき
第六巻へ泊瀬にまうでゝ人の死
ぬるをとぶらひ
給ふ事を
ものがたりにかきつゞけたり
女良二
とひおきて悪ず人と
うれたきことをかきをきそ。こゝろ
なくなりぬるぞうれしき

あらねどこゝろ弱くおもひ
又なくなれもいかゞ
それを歎
あはれとは
思亭記よ。服盡則情盡。情盡則忘之。矣とかゝれ
うらみざるやう
いつまでも
改葬よ泊瀬にまうでゝ成ゆくさまを
文集。古墓何代人。不知姓與名。化為路傍土。幸有
古墓生
集乃詞にかゝり。
墓のまわりを
垣とりまはして
墓をも
もらしいとんとそ

まうで　そこに又紙文臺の句もありき。李の
嵐よもつづくをひをぢそのそ
そうそうよろくばめそうそ
句桑濶乃うの　はるのきこの
野槌云陳後山思亭紀其畧云。賢不肖異思。故豈
不以有望于其才。不以思于為材。視其榛棘。思以為薪。登于
其丘墓。思發其所藏者乎
雪ふりかゝりてうぬ人のうつくしき事を
てんをやうそて。雪の夏行のもの
ぜ雪いつぐるそ一筆のうまねがのひぐくし
うん人の作う筆事やいつべきうん。ぜひくもち物
花活んうといひうしーかわーうつ。
をさ人なれどうづりのこと
あれうり二時き人の句のやさーまとぞれ優白

あう紙うりおの時よ人のる死汁去墓もあうさ
なくまうーの私をもうせをもうそ薪となれぞなの
うひをき事をのうさんれぞはなのうづひこうやうよ去をもうて世くのうふみを
のこれそたぐ人を言約をよくあうまりきの
んなや　雪のおりそ句よ
て。氣をはくべさ名乃きうたなる事をもうをうと
人のうとハ　ひゞくー
ふ　碎く也雪よんのうつぐる紙ひぐある人とゝめた
る句
おゝかりハ　笑ふ　きゞつべさうそ
九月廿日比ある人よさそ
ありく事約よおゞ　出る糸ありく。ひるいせき約
て入ねぬあをまうる庭の雪

ちあやふうもちりりて。西びくるこまついとあるん
なりぐらもぐまく出ひめまでぐる。こぎ海乃優
よ西びくて。こみくかくれもちぐ出ひめまでぐる。こぎ海乃優
を今をこうをあそひ月ろくまぐやぐそけ
ありうまくべくち梅ーうくの。海まで月ろくまぐやぐそけ
とハひぐそうちくんぐやうろ人ありうくの事ハまぐ灯夕のんぐひ
うりうくべー。まく人狂をくうをきひくうをのろうとや行り
梅り有不　兼ねをさそひ人の道の狂まく
ある家ハくうちうくべきあを梅り出うく
ひるひせきもて　事用ぐうめりひ
あありくそまぐとたきろうあそ。貝ぐうこと
て焼くうき燭のなりくるうそい
出行ひ　兼ねハ和ようく行居うくべー。あまり行をよ
もありうぐとこ

とすうくーあくそ
家乃有くうは乃書戸れあきろうを今かぐく。
さすぶ乃をくうやうあをなくで月ろぐそまぐり
と也　点湿ち家の和りくうくまぐ戸をそひぶ
事ハ女ねうまくと礼紀すくうぐ北風
くうひぐそうちくうは乃書戸れあきろうを今かぐく。
やぐそうをこうりうーうくの事ハまぐ灯夕のんぐひ
おりひぐそうちくんぐやうろ人ありうくの事ハまぐ灯夕のんぐひ
らぐぐうんあうろかひうくうくんと也
ありとハいぐそうちくん　業ねうくんあうくべーとは
亭主いぐそうちくんと也　彼人平生ぐんひやきーさ
ゆくと　かやうの乃まぐべ乃　彼亭を
乃ぐうくうさ海どくを残りあくぐうの事ぐと也
さ人貝ぐりよ傍よたーうくいうねまーと也

以二位乃人の事をそはる紀人ともの
う称ようとかそうぞさそなどめ乃位いこと私やさ
しさ変ぬ此、ものまぎ乃優うる事をつひそく言
ひそうふんづひくべくもものぐくやうふあるま
ほそそのみや
今の内裏作りまおされて宵織乃人くまんを称
そうふいづくも難のとそなどさ遷幸乃日ちうを
成あうに玄輝門院御殿乃くぐれ
完ちゃうくあらをなくてぞあらーと作りまうくこと
トうりくう。是もえよ、の人くまるくみちをちう
くれぞあやまりまくなく此ま又おの作よ兼ねと
此ま乃実をちうをり。又おの作よ兼ねとぞ面
つまくく彼ぞれあまぞ乃ふうをいをくんくけう
こをいひしー次ま乃ふとをくんくく絶をくう

いぢくも難のーと　おこ滅。
のくく。希実よたぶねー
遷幸ハ　春云彰殿へ
玄輝門院　春云野日
左大臣實雄公乃女
拾芥中ホ云。南院二条南西洞院西一町冬嗣大臣家
金剛寺ニ水石。公軽公作領之ー
いまの世よ次第ひいたぐひ
えよのくて　春云。養乃字乃野。推云ふ染の私子
甲乃はうー則乃やうぞうぢくてはのそ
ふふくくそうぞ貝のみそ
ふーをぷの世ぞ乃ふりとそいひ
山作もおをくくん乃豊あるんぐくん出地をうくて

おもをそこめんよりもやゝ小にして
用れども實ならず草よ葉の実ありて
ふくろをなしその実あるを圃そこめ
そこへとおもへんなるべし　甲香
本草圖經云甲香今處處有之又有大小用小者佳也可二
異物志一云甲香俗云音合螺屬也可二合飛香燒一之皆使益
芳烈燒則臭
ひさごの金沢いふ　蛤蜊
ひさごの金沢といふもの是なり
あるべし　一名にがごいふ
いふなれども苦味なしかゝる
なるべしいのやうなるがちいさくて
なるべしとぞ　又云俗呼昌蒲
ふくろを甲香にして用るとぞ
有小甲香若螺子とあり
てぐさの捲を見しまゝ
傳へしとあり
これらの人のそのかみ
海にとりひろひ
參納云云
くさぐさ受用事
人なるべしと乃世に物し誰も
岩栖幽事云。漢高祖手敕子云。無上疏宜自書而
勿使人也。夫帝王且然況士大夫子弟乎。今數行字
輒付侍史書之豈非隨貧矣
ハなくもあるまゝをとりそこ
をもんでふくらかしてあるべし
久しくそこなはぬものなり

つまはりし——らまでこゝろもそらに女のこゝろ。
仕丁やあるひとりなどいひ
うれしくそんざうんな神——
——さてあるべきまゝ
山賊と男女の中ようぶ
うるくあるまゝ
つまねど　　ひとりくそゝ
ゐるくうくく女のとゝさうるまで
野盗ゐるがこゝろの
考云。仕丁下部の事
事吟云海旬
ゐるれあるよ直丁　延使丁　白丁などゝ
丁。一説二十以上為丁。白虎通丁壮也云
けいるの
ふるこゝやまんとはりうるて男女をいひ
をゝそれでうもこゝろのゝ
男く女のをゝくをゝ
く海鳥すゝめでゝ
ゐるく河ゐれもゝ
陶ゐまゝ男く
ゐるれ女ゐゝ
ゐるれ男のんをもんゝ源氏物語
あるゝゐようはゝゝ
むんそゝゝあるんまくの
ゐるゝゐ

うしろ丸人をそこへおくふ女でそこへ
とかで。人ぐるまをとうけるの。男女の中ようそうす男
に朋友の間ももつべきこんなこと
人の上ばかりでは　山路男女の変ってそうりくれば
為なく道世の常より男女のことあり人のうしろめや
ひそくろくろくろくろにはんゆるこそ更くやいるぐいみ
人もあるべくそ。ぐなくふぐくそ丸人くれこそ
ばかり
此ハ男女朋友とりふ私をそこへ又こと
き中ものもをもむ一ことのん之畢竟私深ことふ
礼とおと物をくまじりぐ一ことのこうりぐ一
ことあるとき　急ぐそばからそであるおりぐ
我よりをきくき人の隔んぐうきりそ礼

窓とうりこ　とき文くこ
ありなぐ一ぐ今史よおくこ
うくいう人もあまとこ地
為なくむ一ぐこのこ
うぐ丸人のうちけるまこ
ぐ一ぐ二為ハ文くこ丸中ま
くこそ白氏文集よくこ人
とくこ人とこ
とくあり　史記鄭陽傳云。諺曰有二白頭如新傾蓋一如故
益如
らたぐひよ義をくこそうこそ
おとハ魯論よ。君子之用和為貴先王之道斯
為美の小大由之有所不行知和而和不以礼節之亦

不レ可レ行ヲ也　世俗世ノ人ハ利ヲ名利ヨリ活ルヲ知テ名利ニ死ルヲ知ラズ一生ヲ名利ニ役セラレ又名聞ニ役セラレテ一生ヲ苦ムルヲ知ラズ畢竟人間ノ一生ヲ名利ニ役セラレ苦ムル事ナレバ浮世ノ栄利ヲ貪ルヲ速ニ棄テ一生ヲ楽ニ暮スヲ得失ノ境ヲ忘レ賢愚得失ノ人ヨリ笑ハルヽ等ノ沙汰ヲ意ニ介セズ一生ヲ楽ムベシ。創ノ善好乃人ヨリ笑ハルヽ等ノ沙汰ヲ意ニ介セズ一生ヲ楽ムベシ。創ノ善好乃人ヨリ笑ハルヽ等ノ沙汰ヲ意ニ介セズ一生ヲ楽ムベシ。

荘子盗跖篇ニ子正為レ名ト我正為レ利ト名利之実不レ順於理ニ不レ監ニ於道ニ吾昔ヨリ子語ニ於無窮ノ日ニ小人ハ殉レ利ニ君子ハ殉レ名ニ其所レ以レ変ニ其情ニ其性則異ナリ乃至於棄ニ其所レ為ノ而殉ニ其所レ不レ為則一也

名利ヨリ活ルヲ知テ

ウヽ世ノ人ハ利ヲ貪ルヲ知テ名ヲ貪ルヲ知ラズ名ヨリ活ルヲ知テ名ヲ忘ルヽヲ知ラズ名ヲ忘ルヽヲ知テ名ヲ貪ルヲ知ラズ名ヲ貪

…まるをいふ　財を求めて
…よ富をいへで富をもて
…財を害ふをいふ　利を求て
…害をひろげて財をもとめ
…ふ人の財を
…財をもとめ
…害を
…財をもとめ
…ふ人の財を
…財をもとめ
…害を
…財をもとめ
…ふ人の財を
…財をもとめ
…害を
…

含は山ふかくして玉ハ淵より
篇ニ蔵ニ金ヲ於山ニ蔵ニ珠ヲ於淵ニ不利ニ貨財ニ不近ニ貴富ニ不樂ニ壽
不良ニ夭ニ不ニ栄ニ通ニ不ニ醜ニ窮ヲ
珠於淵ニ 同篇ニ蔵ニ金ヲ於山ニ抵ニ璧ヲ於谷ニ注ニ抵ハ側擊也
うばゝれぬ名をもち紀世の賢人ありうべ
くれ位ふかくやんごとなきをもとぐれ多くの人ともや
うつゝを離れ家をまもりて利欲のまじらひもなくて富
のかぎりをつくし絃ほそどもあまたいとゝ賢人
聖人うばゝれぬやうにや名を後さんこうあるべう
ぬるまゝ物はしひとへに多くの紀世の賢人の
うち物給ふもの
第三節ハこゝまで君位をもとぐれ富をもとぐれ利欲の
たぐひまれにも心をのぞむもの多くの榮利を貪るよりてをろかなるたとへ
名誉と富貴と有ん賢人の
ゝり
たとひ身死ぬとも名を 惜ム歟の名誉ハ
云。白氏文集卷三十六 骨不ニ朽名
をぐれうの人とやいつまでも揚ゝく
たとひ身死人も 文祖の陰ありて一旦の權勢ありて
官位ふかゝるとも一賢人聖人
もゝの聖賢もまして君位を求さり一事をいつり
まあゝゝとの一句眼目ニ人の
我之師也。親ニ卑賤ニ職ニ

ふりはらう紀人りこえ又一こえんをこえべし
たゞ一ことのみて学を求め學ぶ我人のまよいをも
智恵おこして八偽あり。才能八煩悩の障もせる
以等又学八ことのみて智恵の明なるを貴ぶ
八ことあよ。智者のよ雖を捨て三ことを名誉の意
を紀こことをあふらう
一向嬰児乃ごと紀ことを学ぶ 智恵おこして八偽
ふ偽あり。さまを偽る智恵乃失もれで智恵へうる
さ紀まぞこと。善き光子さ。大道廃有仁義。智恵出テ
有大偽 才能八煩悩乃障もせる
維摩 季吟云才智弁説
問難 善悪乃つゝもり
道よゝこつゝ事なれ八皆
善抄野同 大智度論曰。煩悩者。能令心煩 仆悩故名煩
悩。又曰属嬬。属瞋。属癡。是名煩悩
はゝこゝて吟学びてさるこゝのなるよあふべいるは
ふる智こゝろづき不可
まゝ乃人も智もなく識もなく
瀧ゝふり祖ゝ仏ゝん。皆識
あゝべ。年より學を画滑矣乃さゝひよをふべ
以才ふの八まゝの人も學
名聞利欲ゝりゝつゝぐる事をいゝく兼好年これ
つまゝくよ嵩ぜり
はゝてまゝまるべてふる
そゝりいふをふる善ふの
さ面をいゝんゝて問をまふまうまたり
智よあゝべとハ 才能八煩悩乃障もゝゝこゝれ
ゝおゝ乃智恵と才能とふゝてゝひおゝふる紀
不可八一隅 不可八不善 一事を

一ケ条ごとにあげつらひぞとのゝしる。是莊子
乃祖をもて善悪不二乃道理をいひくさるよ
うの人そこるふ世よくぐまでと雖とそ
堆まるまんといひ一名誉のうへまていま
さていうの絶なきものひ善
人のこを誉いそんとてそこ道書云。莊子齊物論云
方可方不可。方不可方可。又云可乎可乎不可
物固有所然。物固有所可。無物不然無物不可。故道
通為一　是善悪。是非。可不可。然不然。曲直。邪正。一
切世間乃相違をもて兼ぬなことのつまくと聞か
ゝるもの人ハ　是より善
ほまれひとのありさまをいふ誉るもなくとハ
いうるをとうなることへ
なりくるものとハ　いうるうる善とはいよ善た

まとゝゝゝ

でう。第一事八坐ながらにして名利を棄てゝ而も名利の至るを云ふ。一生の結構なり。名利を棄てゝ而も名利の至るを云ふ。乃至名利の要を求めざるを云ふ。名利の至るは名利の要を求めざるの効驗なり　此要の二字 衍文 莊子盜跖篇より興ち名に就利にとあるの要の字なり。假名を合て借字とす。

是以てこそは有名無實ともいひて用ゐまするなれ。

ましてや一生を苦しむるをや　彼閑なるがいとさへなく一生を苦しむるをや　利欲名聞をうつゝなうて云々

名聞をすてゝ云々　利欲名聞をすてゝ云々

第一事八坐ながらにして名利を棄てゝ而も名利の至るを云ふ。一生の結構なり。名利を棄てゝ而も名利の至るを云ふ。乃至名利の要を求めざるを云ふ。名利の至るは名利の要を求めざるの効驗なり　此要の二字 衍文 莊子盜跖篇より興ち名に就利にとあるの要の字なり。假名を合て借字とす。

是以てこそは有名無實ともいひて用ゐまするなれ。

ましてや一生を苦しむるをや　彼閑なるがいとさへなく一生を苦しむるをや　利欲名聞をうつゝなうて云々

名聞をすてゝ云々　利欲名聞をすてゝ云々

をすてゝ北牖をさしもといひ、名聞をいさゝかもとりやめる人をそ云ふ。世をそむきて而も名聞を好む人をそ云ふ。乃至名聞の要れを第一事とをそ云ふ。杜子美蹈雪詩云 新攄朗詠 秋夜 長國寺云 第一事八坐ながらにして名利の至るれ

いそれそりもまことも又まことの人ぬ賢愚貴賤共ぬ
仏性をそなへ乃至草木国土悉皆成仏をぬ。寂然として
そて法然上人の只称名念仏ぬそれぬ往生
とのうたがふ人のそれづれをおもひまぎれバ云つゞ
たるにや

法然上人　野槌云　源空也。姓漆間氏
美作国稲岡人也。父時国母秦氏。長承二年四月七日
生。年十五従延暦寺功徳院皇圓剃落受戒。三期之間。
通受台教。又従黒谷叡空禀密乗及大乗律。凡大蔵経。
律論。他宗章疏靡不披閲。暁見源信往生要集乃二巻
所業。倡浄土専念之宗。承安四年出黒谷居洛東吉水。
盛説専修及圓頓菩薩大戒。縉白蘋然向風。嘉應帝
召入宮受戒。藤相國兼實延問浄土之事。空述選択
集旨之。専修之徒取為秘要。建永二年二月竄讃

州建暦元年詔追趁都城。二年正月居大谷深疾
其徒安弥陀像於床頭。且為臨終助標。空曰佛菩薩真
身今又来也。二十五日。高唱佛号。諸徒助和。午時著
傳持之慈覚僧伽梨。頭北面西誦光明遍照偈而寂
年八十。臘六十六。元享釈書廿五

ひそりとおこなひ念仏よ悔怠をゝす事ぬ

眠をおこたらん間念仏せんと八めひさめてわ
らん間念仏せんと思ひ。或説よ同共さもる事と念仏せん
のやうにいつも得ずり。さるまゝぬ又上人の影
くのやうぬまぎれ無ぬそさるまゝぬ眠つまれまぢ
とせんをやうぐくべくぬ一行をめひさめたらん後怠
そべくぬ観無量壽経第九観。唯除一
時恒憶此事ぬ

又往生八一定とおもへバ一定

因幡國よりの乃入道とやいふもの
こゝにて人あまたこゝろざしひとつ
栗林乃と會してさゝやきけるやう
ゆるさじ梨子
はゝの子とあれば
うゝり師匠よりく
とりて人あつまりて
嫁一人むこ
なり。彼上人の見
ら
彼坊乃法
女なれども嫁

一言芳談抄云。往生人のいとなみ。往生ハ次
云て生るゝ不定と
善ねもころなる人
方。衆生至心信樂欲生我國乃至十念。若不生者
不取正覺。唯除五逆誹謗正法。念佛往生願ある
とゝろにて一定乃ごと又同經ニ不得疑惑とも
疑ひ惑ふ時ハ即不定の義
念仏をれだとハ
不取正覺とありまぎれ疑惑乃者ハ往生もぐ
どもさぐ念仏して佛を念ずるがあり乃ハそ
念を果遂て往生
向荅料簡ニ八信數下品
不往生
若雖疑佛智而猶願彼土修彼業亦得往生

お免てうそりとのへてう。山路をゑんそ。乃らのんづくひや
せん志あるく人へ。まゐ乃うしこみむまうまづひて
用べくこう　　ひのもうと、は世をゆるゑ
を超ごろひうる　　こもうこ
うをとる　　人まろうる

又月の白雲茂乃くべる紙乃絵　よ。車乃米よ
離人へ立てぐそくみぐぶりて座らのき
りふうりをれどぐとふく人物なくまらこんそまけ入
ぬべさやうこるりおうよむひるはあつら乃
末にて注郎乃はがりて末のまふはいわくねろこ色
とうつるものぐいうう睡てねらねべさはよ風をさん
う摩ぐうりあまをゑろ人あぎそりねさて。世乃
ちまをのれぐくあやうさ校乃ようてやとそ紀ゆき
て神つるんまものよ。我んうふとやひまうり

うれくか生死の到来　今うりやあくんそんを
ふまてそのんて日をそくしへ。物ろうるは事いち紙ま
さりたる絵をひうれだおる仏人どまこふさま
こうひそれ元をろふふいとのひてごれこうをゑろう
てあくへいう郎のへそて而紙さりてくび入仰りう紀。雅
乃こうり雅乃八田ひうざくんなれどもおうう乃
物ひうるねあらーて物よあろうそるうや。人まそよ
あくよむ時よとりてあくへ威ぞる事ちえよあくん
まこ。仏云常をそろ　　重琴云生死の到来
品今うるやあくんまを乃べくへのの之。人彼
名利よはろれて南ろいそるさも。山云常を乃ろ
右く。奥ももむぐう事乃やうざ仏命を渉ろ多ろ
そあうりそれりとふろうざまでるりとたりうこ
おまて巡ね乃西人の不るべー

賀茂乃くらべ馬
くらべ騎射 左近の
年中行事 根源
第五位 進 走馬
此より止事 終て
まりとや 車乃ま
雑人と 榮 博
ぶる物のもちまけ
とゝもあり あつち乃
是又月次 拾芥 證類本草 云 五月吾俗人
取 楝葉 佩之 避惡氣 抗毒 云 まくそ
どあつちもいと 物
是又月次 あつを
なつて 人を

足下をゝ。奥深く 世もまことの
面癒るもの也 白物 本朝文粹 三 我ん
生死乃到来と 只死乃まつ事と
うそぬまつち おつ
を曽ぬ乃ひとりて いつことも皆人のむまあり
うやと 人まつ
人 非 木石 豈 無感 云
庵 楠中将 いふ人のこと
即もる 病あり。鼻乃中
さく 新ぐ。鼻乃中
ぐもはくろひくろ
ぐもれまぐひて
茶乃面のやうふみて
なりて用いて

…てのちも坊乃うらの人ともとゝもにあそびわて
まひさしくありそめてうつくしきりそゝ来
つまひとの病をあつる事よりはなれ
山能さ乃雅信朝乃奇病あり一物もくらうこゝろ
人ともさゝぐくの病なりそれ
されもそゝ病人もさて悔むべくもそこ又病者をあ
るじ乃事なれもこのんでや。論語に伯牛癩を病
給り。命矣斯人也而有斯病也と孔子のまつ
事なとおもひあわせてしるべし　寿云山能天命をさ
とりそゝ。荘子の大宗師篇の子輿が病ひ瞤隠於臍肩
高於頂　などありそく。且史物不勝天久矣。吾又何ソ
悪焉などいふ事をおもひあわせて出しそれ
唐橋中将　参議中将雅清　寿云村上源氏久我
乃庶流なり

唐橋惟大納言正二　大納言正二　侍従正五下

通資
- 雅親　参議中将正三
  - 雅清　中将
    - 行雅　僧暮
- 通頼

教相

野槌云まつ…

…ものをもとむて

二乃森の物して　寿云

…安摩さそ

…二の森とそ

…大和物語にあきしまうかく病し

寿云是太宗師篇の命ハ

…山結句等妙なり一説の眼目也

…ひハ歟云乃業病なるべし

…説を用ひんべし

ゆんうさまつりほうそ
吹やそ山のさりふ拵(こしら)の
春云は山路又えんよ風情(ふぜい)上乃旅よ面ぞろ
名あひさぐるる称で
どもそ　　旅やうろうろ
光文庶　物衣　名ハ
ひとの紕(まと)萠黄(ギ)紫(むらさき)
物衣乃時そ必為帽子(ぼうし)
指貫(さしぬき)ぐ紋ハ向さ菊の丸或ハ亀甲(きっこう)
名そとりふ申也物衣
者已下衆人共所(ところ)用也。古時有(テ)制　臣下ハ不用。近代
五位已上　晨殿六位　男之
おもうんぐなうくるぬ義ぐ或説ぅ仰合ぅ様と云
八裾ぐ　さぐやうなろ

河海ぅ　烏帽子(えぼし)　詩
　　鴉(からす)羽(は)ぐ似(に)てハ　名也
してぐ　　堀川百首
小山田乃のまはの春ぅ
ぐぅぅぅ　旅ぅぅぅ
春ぇえもいまび始ぅろ人
鳥(とり)むぐ　ありれぐやま
筆(ふで)れ上をめさたまでも野(や)辺(べ)のまぅ人もあぅ
ぐぐぐの　　芭蕉乃ゆ
くぅぅてぅぅぐ　指門(さしかど)乃ある　もまび
揚(あげ)ぅぅてぅぅ車のぅ名ゆ
ぅてぐぐぅぅぐ乃宮のあぅまれ北ぅく
沖行ぅ大ぐぅぅぐ堂(だう)乃ぅふ法御九
ぐぐぅぅぅ

うちうち女房のをひ風ふういるとて人めをもれ心里
もいそんづひ
兒彼恵門院内の褌
代寿命院の抄よもつ野円和名集云掛床之車を
おく
掛　妻云歟
もつてをくぬくぬくはかりのやうなる物
めとまる　心覚ふくハめづらかなど
乃宮　そんでよまとこんへ　えふ　歟金　クワウ
后宮　渡　トヲ
まん面もつべー　御堂乃廊　廊下
をひ風と　人の形
うちうちなるべー
なごの期　イ
なるべー

ぬ乃まへにもそれうち始のつらなをさきてまうち露まうし
もれて雲のひうごとぐゆ
乃そうくもりハ雲の性
のそれともまさめ
ぬうちまも乃新　キヤウ
ぬうち
くく　雲のひれをのをこのやうなくさうく
そのゆきもやさあらうべ
くそ雲ともやさうべ
公世乃二位のきくふうち
そうあーさ人うりうち
事れぬ人　桜　キノ
うくそのまをこまくまうし
まりくぬ乃傍ふ
井戸ありをてたりそ

皇朝類苑四十六　江南邊鎬梁慥寡斷唯好安民初從軍平建州凡所克捷惟務全活建人德之號為邊羅漢及克撫潭鎬為統軍諸將掠潭人益嘉之謂之邊菩薩及帥於潭政出多門絶無威斷惟事僧佛楚人失望謂之邊和尚

柳永のもと強盜法吏と号もう僧色々ひそかに強盜をしあるいろ捉人よまあれをはたらふあうとぞ
お話ハ実名ハはゞかりまゐらせ候へ人のうつくしめふうさ候ハ
こと実名をかゝず人のかぎり
い強盜をしやうよろこと
人の実名ハ紙ぜ実名をかきつけて
邊好乃仁にもてまゐら
と号もう僧のうふもつて悪人の

野趣云々

動ハよ強盜法師

盜賊をも

なりうらうく沙石集

それ小みのものあるも。其秋僧よんでありし
ほよ出。賊物。
そとくしぐ男乃あらんハうをべつくに
そて賊徒をもそ。悪ひあらめ善よ越らめん
と地の上心あり。是小
世乃杯呼もそくもうふもり盜
即と号もそ。衛乃実の名を悪とふ悪
べし。衛乃実の名を悪とふ悪人よりてうう
なれど心もとり小悪人実宮らう僧如ハえびす
乃名もれども。叔孫得臣
僧如と名づも。鵞実そ
号もて殺と。范雎それを戒て

御ことにて心あをさ
いとも尼ぐ参乃初ぐ
乃ころのひころ時ぐ
ところぐ
害ありといひつつ
鬼乃ありてまさきあを
ころと合まて代りぐ
りて心服をみ行べき
くまでありぬ
ちをぐ
又拾芥云　憚時頌　休息方命　急々如律令
ありぐ
ざへ
なるべく

宮ぐ
おへめされて
舎ちぐ
うりぐ
あのれ
なりとくく
心服乃
つきともの
院ぐ
世ぐ
三年六月
東西
寂勝法
おな

寂勝法師
按察使拾中納言三位源川中納言
大納言光雅ぐ孫。拾中納言光雅ぐ男兼久
卿。同七年十二月
院の寂勝法師
おな

くも仰うまくもありぬべし
やんごとなき
野ごゑ仰乃ん
はくろういとくるくぬ
まことをくまのいそぐり
器物をふところのて
て女房うさぐるを
なれだなり乃はそめ
のあるまひりと地の
侍うたらくで老のおそ
がごとく

老来て始て道をしぞ
人を是少乃人より
此仰人間乃云帯を

ぞとりの事をいふ
老の云を頃云物老む
人

事ふくは一分を古横多是世
大ことをあぶたりやう
壊となれるをこれで
くく奥うり云帯のまこ
そやふりいひそま
うろせまれりなどり
なれしい　それある
そうに病をうそ
うそあるかれおや
まりとの一を仰乃まこ
くく物ふくもべきことをいひ
ふこそ時悔もうひあ

此等二等、第一等の人をこそ取りて世の事を執り沙汰あるべき人なれ彼等は
いろり　そもそもさるものとハ
じきと地ゐろりの事
云常をまもりさる人多く俗にまぎれ
こゝろ　云常の事は此世のいとまをいゝべし
人ごと云常の事をまもりせまりをんなひとかを
さしたのまもしろゆゑ此世乃
おりもうもく仏をさしたてまつりて
ざゝん
此二等を彼地獄ハ世尊を云常と云
まびいこと此世乃人をいとふ
そそものこと　せまりねるといひ
さらりてゐるもねん
何のこと也　濁世
云常とハ古猿よあらじ
此世乃ありさま
乃人欲をさる　まねやうとひ
ひと有なるし　つまは乃人妻にて自他の要事をいとき
ざて云。今更云ふ支ありて
として。耳をふさぎ念仏して
禅林乃十則ハ心戒とり
ありそめなるをおしへさいふ
なく常ハうごくまりてのこと
此等ハ云常をまもりて
はれ素懐をとげよそ古人のことをおもふて
あらまほしと世人よいまし
自他乃ありさまとハ　そもそも他人のこと
も心ぞ　肝要乃事也

探我ハ　寺野也

来迎の儀。観世音勢至。俱に行者の前に現じ。
を指授して。道俗よき先世の
十四日に。傳聞。有聖。念佛を為す業。專ら惜す陰を。若し人。来て謂へ
他要事。聖人。陳ぶ。今有て火の急の事。既に逼れり於且暮に塞れ耳の
念佛。終に得往生の
一言芳徳に忘戒上人は
とひろめ。二衆ら
おろかなる紀有ことを
房として居所と定めて
ありけり。俗姓は
ふるまひ宗教
遂に乃ち比伊勢國
つゝしみ事あり
乃人男女
一今京院に
ひあつまりさゝく
云人を
より安居院の
人皆心をさして
あり。今出川の
あり文
く跡を紀事
おほくあつまりて
を制淨
当て二三
ごとくにふるまひ
此院は世乃
りけるとぞ

[illegible] 其云む園院の [illegible] 其名乃ちといふ
住まゐの内り奥の座敷 將の客間 [illegible] 其外は西園の
池水を面園る廣小座敷 家よりまつすぐに [illegible] 威勢あり
ます〳〵名高き旗家の中より出来る [illegible]
云ひもてなすこと [illegible] 吉田よりは [illegible] 其外は
ろう居住乃比そや [illegible] 院乃御機嫌 [illegible] ハ
一条大路よりかへ岐乃系の [illegible] 御機嫌を
しるとて [illegible] ちやくちやくする [illegible]
いりもてなすこと [illegible] 其外八百石秒云ふもや
かく旅人 [illegible] 其外は [illegible] 乃ありつる [illegible]
なく旅人 [illegible] 庵抔 [illegible] ハねぎらふべしとて
なく [illegible] 先ちやくちやくをうばひたりあるべし
めりともむべし 人をやりてうかゞふ
れこゞうゆきて [illegible] 神妙なるべし 醫師 [illegible]
あるかあるやと [illegible] 此尼御二人共 競名闘徒 當黨相助名諍

ひもろ〳〵をとめすゝ
世りおこれりく支。右今さ
衣服をきる人あり紙で服妖
ある紙で言妖といひめづら
といひまま。多敵出ま多
陽乃理りそむくあよう
り多よ云をおりまつ
しくもろ〳〵漢の成帝乃
洪水ありこんとく安城中大
ら先山よのがん [illegible] ハ
をあしもあそ多事あ
うくりくれでばかりて洪水
も怪これ物ごりハんくも
うこうられいつものハまれ

雉雄る九鶏言妖云乃

改のことやうふるへて天地乃神
もいさ〳〵へ
亀山殿の御池 渡月橋 大井川の水をまち
大井のさと民ら和名抄にて水車をはこばせられ
おわりし乃あり をもて数百輌
けるふた方めぐらざりくれども
りまちでいうよあ
人をあつまへさせ
さいつをたりるが。和
家事めでたりそり業
ごとき記もの
山路はるの乃夏日を道の人を引べしとのに
亀山殿 春云亀山院八八十九代。諡義亀山と申
り山荘をそ〳〵御所あり 野日

季吟云此院画日く能げ
よき古事を山乃楓あるさう
集り乃し侍り又云此院
乃松ふけをうたよめる宮の池あ
より。被亀山殿乃池あ
らん 少をうろん引乃字をうより 日本紀
神功皇后紀云。日ニ鮮河水一欲潤神田
水車 一名龍骨車又翻車ともいふり。魏馬鈞初製
と尋到源頭よ 日本乃涼和天皇天長年中
よ法ありて車をはこばせ
料 宇治乃水車
乃名ありて歌もあり
別 のやうにて結付てつのごとくせ大井乃
ふた氏乃郷日よりてるへし

徒然草文段抄　巻之二終